

黒人英語の成立と構造

小林 泰 秀

The Genesis and Structures of Black English

Yasuhide KOBAYASHI

Abstract

This paper discusses the origins and structures of black English from historical, social and linguistic points of view. Although black English originated as a pidgin-creole language, it has been losing some of its original characteristics and has become closer to standard American English. By looking at the structures of black English mainly in the works of Zora Neale Hurston, we discover that present black English is in the process of shedding its creole English characteristics.

1. 序

本稿は Hurston の二つの作品, *Their Eyes Were Watching God* と *Spunk* の中で, 黒人間で話される会話文を分析することによって, 黒人英語の成立を歴史的, 社会的, 言語学的展望に立って究明しようとするものである。*Their Eyes Were Watching God* の初版は1937年に発行され, *Spunk* に集められた八つの作品は, 1925年から1942年の間に発行されたものである。これらの作品は20世紀前半に書かれたものであるので, 今日の黒人英語とは異なるかもしれないが, 黒人居住地区内で黒人間で話される構造は, 基本的にはそんなに変わっていないと思われる。又, 文学作品として書かれた文体は, 実際に話される言葉とは違って, 形式ばったものとなり, 黒人英語の資料としては充分でないと考えられるが, 黒人作家である Hurston は, 鮮明に黒人英語の特徴を作品に表現しているように思われる。Hurston の作品の中の黒人英語は, 初期の黒人が話したものと大いに異なるものであり, 脱クリオール化の過程にある言語と言っても良く, 本稿の研究の目的もそこにあるのである。

2. 黒人英語の起源

アメリカ黒人英語の起源に関しては、大きく分けて二つの説が考えられる。一つは黒人英語の特徴をイギリス地理方言に求めるもので、起源は純粹に白人英語が基になっているとする白人至上主義者の考えである。もう一つは初期の奴隷達が用いていたピジン英語がクリオール化したものに黒人英語の起源があるとするクリオリストの考え方である。

A. 英語起源説

英語起源説は、初期に奴隷としてアメリカに連れてこられた黒人が白人から学んだ英語が、今日の黒人英語の起源になっているとするものであり、当時のイギリスの東アングリア方言が黒人の英語に影響を及ぼしたことから、東アングリア起源説とも呼ばれている。この白人英語至上主義の立場に立っている言語学者の考えは次のようなものである。

- (1) By and large the Southern Negro speaks the language of the white man of his locality or area and of his level of education. But in some respects his speech is more archaic or old-fashioned; not un-English, but retarded because of less schooling. As far as the speech of uneducated Negroes is concerned, it differs little from that of the illiterate white; that is, it exhibits the same regional and local variations as that of the simple white folk. (Kurath 1949:6)

Kurath は南部の黒人の英語は白人のとは変わらないが、教育レベルが低いために古い形態の英語を話しており、又、教育のない黒人の言葉は教養のない白人のとは変わらないとしている。更に Kurath は黒人英語と白人英語は基本的に同じであると述べているが、教養のない白人の英語と黒人英語は必ずしも同じとは思われない表現も多くある。

- (2) I noted above that most dialectologists, by studying Atlas records, had come to the conclusion that there were no significant linguistic differences between the races. Perhaps I should change the word significant to qualitative since that is most surely what they meant. My own research on the Atlas records for Eastern Kentucky suggests that there are no qualitative linguistic differences between the races, but there do seem to be quantitative ones, ... (Davis 1970:53)

Davis は人種間に質的な言語学的相違はなく、量的な相違はあるようだと言っているが、彼の考えは Kurath のと似ており、黒人と白人の言葉に体系的な差異はないとするものである。

- (3) They learned their English in the seventeenth and early eighteenth centuries from the white people they were most closely associated with, largely illiterate and semiliterate overseers. Since the overseers were a mixed lot, from various parts of England and the British Isles, it is futile to try to trace Negro speech to any particular English dialect. (Eliason 1956:108)

Eliason は、黒人は密接な関係にあった教養のない白人の監視人から17世紀と18世紀初期に英語を学んだが、彼らはイギリス諸島の色々な地域から来ているので、黒人英語の起源をイギリスの特定の方言には求められないとしている。つまり、黒人はさまざまな方言を話す白人から英語を学んだので、黒人英語はイギリス方言の混ざったものであり、特定の方言を辿ることは出来ないとするものである。この説が正しいとすれば、黒人英語で3人称の *-s* がないのは東アングリア方言であり、継続相 (durative) の *be* はアイルランド英語で、動詞前接 (preverbal) の *done* はスコットランド方言ということになる。

しかし、黒人英語はイギリスの方言と同じ意味に使われていないし、黒人の奴隷達が器用にも諸々のイギリス方言を聞き分け、特徴を識別し、黒人独自の言葉を作り上げたとは考え難い。

初期の黒人が白人から学んだ英語は東アングリア方言であり、それが今日の黒人英語の基になっているとする東アングリア起源説を唱える言語学者に Krapp (1925) や McDavid (1969) もいるが、黒人は東アングリアから移住した訳ではないし、初期のアメリカ移民に東アングリアからの者が多かったとしても、二つが基本的に同じ方言だとは言えない。黒人英語の起源をイギリスの方言に求めたり、黒人英語を単に英語の非標準化したものであるとする英語起源説は、黒人英語の独自性を認めない白人英語至上主義の方言学者の考えである。Krapp (1924:190) や Pyles (1952:38) が述べているように、黒人は知性が低く、怠惰性があり、調音器官が白人と違うことが白人英語との相違の要因であるというのは、偏見的な考えである。人間は人種に関係なく誰でも、一つの言語環境を与えられると、同じようにその言語を習得する能力を持って生まれて来ているのである。

B. クリオール起源説

西アフリカ沿岸や西インド諸島で奴隷として働いていた黒人が用いていた英語は、アフリカ諸語と英語の混ざったものであり、ピジン英語と呼ばれるものであった。やがてピジン英語はアメリカへ渡ってからクリオール化し、それが今日の黒人英語の基となったとするのがクリオール起源説である。この説を唱える言語学者の考えは次のようなものである。

- (4) I would like to suggest that the Southern Negro 'dialect' differs from other

Southern speech because its deep structure is different, having its origin as it undoubtedly does in some Proto-Creole grammatical structure. (Bailey 1965:172)

Bailey は南部黒人の方言が南部白人の言葉と異なるのは、その深層構造が異なるからであり、最初のクリオール語の文法構造にあるとする。

- (5) Of those Africans who fell victim to the Atlantic slave trade and were brought to the New World, many found it necessary to learn some kind of English. With very few exceptions, the form of English which they acquired was a pidginized one, and this kind of English became so well established as the principal medium of communication between Negro slaves in the British colonies that it was passed on as a creole language to succeeding generations of the New World Negroes, for whom it was their native tongue. (Stewart 1975a:226)

Stewart は、奴隷としてアメリカへ渡ったアフリカ人が伝達的手段として学んだ英語はピジン化したものであり、それはやがて次の世代ではクリオール語として黒人の母語になったと述べている。

- (6) After the Civil War, with the abolition of slavery, the breakdown of the plantation system, and the steady increase in education for poor as well as affluent Negroes, the older field-hand creole English began to lose many of its creole characteristics, and take on more and more of the features of the local white dialects and of the written language. (Stewart 1975a:230)

更に Stewart は、南北戦争後の奴隷制度の廃止、プランテーション制度の崩壊、貧困黒人の教育の向上によって、古い農業労働者のクリオール英語がその特徴を失い、次第に白人の方言や書き言葉が使われるようになったとしている。これは白人英語との接触によってクリオール英語としての特徴を失いつつ、脱クリオール化が進んでいることを述べているのであるが、言語は接触を続けることにより、互いに変化していくのは自然なことである。しかしながら、Krapp (1924:192-93) や Pyles (1952:39-40) のように、黒人はアメリカで初期にはピジン語やクリオール語を話していたが、やがてそれは消えてしまったとする完全な脱クリオール化は、今日の黒人英語によっても断定できない。

C. BEV 説

以上黒人英語の起源説の主なもの二つについて述べたが、単に黒人英語の成立の起源や初期の黒人英語について語るのであればそれで良いであろう。しかし本稿では Hurston の作品の

中での黒人英語や現在話されている黒人英語を見ながらその成立と構造を究明することに主眼が置かれているので、社会言語学者 Labov のような考え方が重要になる。彼は白人英語と黒人英語の違いを認めながらも、その違いは表層構造にあり、黒人英語の特徴は社会的要因にあるとする説を唱えている。Labov の説は次のようなものである。

- (7) There is a great deal of evidence to indicate that BEV (black English vernacular) is more different from most other English dialects than they are from each other, including the standard English of the classroom. If we do not accept the fact that BEV has distinct rules of its own, we find that the speech of black children is a mass of errors and this has indeed been the tradition of early education research in this area. In our early study of the Lower East Side of New York City, it quickly became apparent that black speakers had many more “nonstandard” forms than any other group by a factor of ten or more. It is confusing and uneconomical to approach these forms in terms of their derivation from other standards.

(Labov 1972:36)

Labov は、黒人英語を black English あるいは black English dialect と言わずに、black English vernacular (BEV) と呼んでいるが、vernacular (地域口語) は特にアメリカの大都市の中心部に住む黒人の若者によって話される言葉であり、又、主に都会に住んでいる黒人の大人がくだけて、あるいは親しい間柄で話す言葉である。Labov は(7)で、BEV は他の英語の方言とは異なっており、独自の規則を持っていて、黒人英語に見られる非標準形は、他の標準形から派生されたものとは考えられないと述べている。更に Labov の次の文を引用しよう。

- (8) Are the observed differences in surface structure indications of even greater differences in the deep structure, or merely the result of low-level realization rules, lexical inputs, phonological and late transformational rules? Our own investigations have regularly pointed to the latter alternative. We have frequently encountered cases where sentences differ strikingly from standard English in their surface, yet in the final analysis appear to be the result of minor modifications of conditions upon transformational rules or late stylistic options.

(Labov 1972:48)

Labov は黒人英語と白人英語の体系的な差異をはっきりと認めながらも、その違いは表層構造にあるのであり、変形規則の適用条件の若干の違いによるものだったり、後の随意的な文体の選択によるものだとする。黒人英語と白人英語の違いは深層構造にないとする Labov の説は、英語起源説に含まれても良いのであろうが、Labov の言う BEV には白人方言にない

独自の話し言葉が存在し、それは都市に住む黒人に顕著に見られるという社会的要因が大いに係わっていることから、他の起源説とは区別してここに挙げたい。Labov の社会言語学的考えに対して、Chomsky (1977) は *Language and Responsibility* の中で、次のように述べている。N. C. は Noam Chomsky, M. R. はフランスの言語学者 Mitsou Ronat である。

(9) M. R.: I think it is very important for Labov to show that the language of the ghetto has a grammar of its own, which is not defined as a collection of errors or inflections of standard English.

N. C.: But who could doubt that? No linguist could possibly doubt that.

M. R.: All right, because linguists know that this is a linguistic principle. But Labov is primarily addressing teachers, pedagogues who do not recognize, in general, the legitimacy of the spoken language, and who, besides, have the ideological task of inculcating a feeling of inferiority in those who do not speak the standard dialect.

N. C.: He is doing something very useful on the level of educational practice in attempting to combat the prejudices of the society at large—and that is very good. But on the linguistic level, this matter is evident and banal. Stone Age man spoke a language similar to ours, so far as we know. It is evident that the language of the ghetto is of the same order as that of the suburbs. The study of Black English, from a linguistic point of view, is on a par with the study of Korean or of American Indian languages, or of the difference between the English of Cambridge, England, and Cambridge, Massachusetts. (Noam Chomsky 1977:54-55)

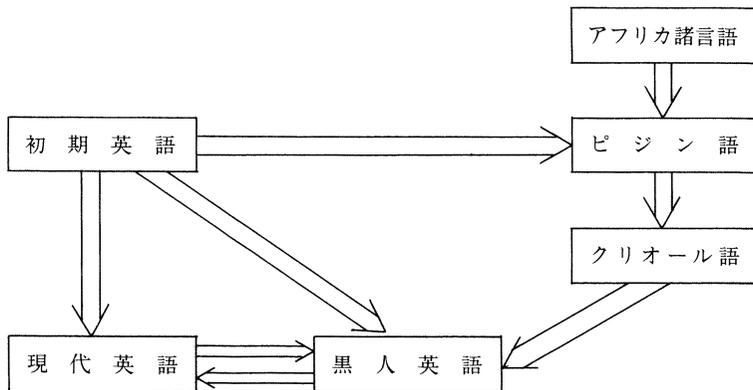
Chomsky は、都会の黒人の話し言葉のように、社会的要因も言語に影響を及ぼすことを認めながらも、それは特徴に値しないとする。彼は社会言語学的な立場よりもむしろ方言学的な立場から黒人英語を見、黒人英語の研究は他の言語あるいは方言の研究と同じだとする。Chomsky の見方は、社会的背景が黒人英語に独自の特徴を生み出していることや、黒人英語は成立の歴史が白人のと異なることを認めないものである。黒人英語の研究は標準英語との相違を見るだけではなされない面が多いのである。

D. 脱クリオール化進行説

本稿はクリオール主義の立場に立ちながらも、黒人英語は白人英語との接触によって本来の特徴を失いつつ、依然としてクリオール英語が見られること、又、黒人英語は過度の修正や形式ばった状況の表現のように社会的要因によって、黒人独自の特徴を新たに生み出していることから、現在の黒人英語に見られる特徴は、脱クリオール化の過程でのものであるとする。こ

の脱クリオール化進行説は、上記のクリオール起源説とBEV説を混ぜ合わせた中間説とも言えるが、この説の主張したい所は、黒人英語の構造は他言語との接触によって生まれたというところにある。脱クリオール化進行説を図式化すると次のようになる。

(10)



(Burling 1973:122 参照)

3. 繫辞 (Copula) の欠如

繫辞はピジン語や初期の黒人英語にはなかった。

- (11) Gullah & Tshiluba < Bantu
 a. you going at < udi uyaku 'You are going-to'
 b. you stay at < udi ushalaku 'You are staying-at'
 (Holloway & Vass 1993:2)
- (12) Me bella well. 'I am very well.'
- (13) Kidnapper: Very well, what was your master's name?
 Cudjo : Me massa name Cunney Tomsee. (以上 Stewart 1975a)

(11) はガラ英語であり、(12) は17世紀にオランダ領ギアナで話されたものであり、(13) は1776年に上演された劇の会話である。繫辞の欠如は Hurston の作品にも見られる。

- (14) a. What dat ole forty year ole 'oman doin' wid her hair swingin' down her back lak some young gal?
 b. Betcha he off wid some gal so young she ain't even got no hairs.
 c. They just wearin' out yo' sittin' chairs.
 d. You in particular. (以上 Their Eyes Were Watching God (Their Eyes))

黒人英語の繫辞について、英語起源説を唱える白人英語至上主義者は、繫辞は標準英語と同じように深層構造にはあるが、削除変形の適用で表層構造には表れないとし、クリオール主義者は深層構造そのものに存在しないとするだろう。(11)～(14)の例文を見る限り、クリオール主義者の考えの方が正しい。それはアフリカ諸語に繫辞のない言語が多く、又、ピジン語が作られる際に、特に意味上必要のない繫辞は削除されるのが自然だからである。しかし Hurston の時代になると、次の文のように繫辞がほとんどの文で使われており、削除される文は少なくなる。

- (15) a. Ah was wid dem white chillun so much till Ah didn't know Ah wusn't white till
Ah was round six years old.
b. Ah'm nearly forty and you'se already fifty.
c. So Ah ast, 'where is me? Ah don't see me.'
d. Dis evenin' we'se all assembled heah tuh light uh lamp.
e. Well then, we can set right where we is and talk.
f. Oh, er, Pheoby, if youse ready to go, Ah could walk over dere wid you.
g. Ah ast de Lawd when you was uh infant in mah arms to let me stay here till
you got grown.
h. Heah you is wid de onliest organ in town, among colored folks, in yo' parlor.
i. She was gone from round dere long before Ah wuz big enough tuh know.
j. Dat's just de same as me 'cause mah tongue is in mah friend's mouf.
k. Is dat whut he been hangin' here for?
l. They was all cheerin' and cryin' and shoutin' for de men dat was ridin' off.
m. If God don't think no mo' 'bout 'em then Ah do, they's a lost ball in de high
grass.
n. They was quality white folks up dere in West Florida.
o. The men was all in blue, and Ah heard poeple say Sherman was comin' to meet
de boats in Savannah, and all of us slaves was free. (以上 Their Eyes)
p. You was playin' wid his brush and put it all over the dogs.
q. Ahm a hush-mouf. (以上 Spunk)

(15)の例文に見られるように、*Ah'm* (あるいは *Ahm*) を除いて、繫辞は *is* と *was* のみが使われている。*Ah'm* は標準英語から見ると、*I* と *am* の縮約形と思われるが、黒人英語では *am* を一つの独立した繫辞の形態素として認識していないようである。次の例のように、繫辞に強勢が置かれる文では、*am* は使われず *is* のみである。

- (16) a. 'Cause Ah'm hongry, Mist' Starks. 'Deed Ah is. (VP Deletion)
b. But Ah *is* married now, so 'tain't no use in considerin'. (Emphasis)

- c. ... and it hurt me tuh mah heart tuh be ill treated lak Ah is. (VP Deletion)
- d. ... and then come back heah tellin' me how nice Ah is, Ah specks tuh kill yuh dead. (Move α) (以上 Their Eyes)
- e. Heah ah is—got uh man dat hates work lak de devil hates holy water. (Pause) (Spunk)

Dillard (1972) も第一人称単数主格の次ぎに来る繫辞について、次のように述べている。

- (17) I would write *Im* for the Negro Non-Standard form which interchanges with *I*; *I'm* for the Standard English form which is a contraction of *I am*. That *Im* is not such a contraction is shown very clearly by the frequent occurrence of forms like *Im is*~ *Im am*. (Dillard 1972:54)
- (18) a. *Im is sick*~ *Im am sick*.
 b. *Is Im sick*~ *Am Im sick, doctor?*
 c. *What am I's to do?*
 d. *Mrs. Smith, is Im failin' English?* (Dillard 1972:54-55)

Dillard によると、*Im* の *-m* は繫辞ではなく、*I* の変形として *Im* が使われたことになる。

(18) の例から繫辞の歴史を考えて見ると、次のようになるだろう。

- (19) *I sick.*> *I is sick.*> *Im is sick.*> *Im am sick.*~ *I's am sick.*

Hurston の作品には *am* は一つの自由形態素としては単独には使われていないが、Dillard のように *Ah'm* を主語+繫辞の縮約形と見なさないのでには問題がある。Hurston の黒人英語では、*Ah'm* と *Ah is* を区別していることから、繫辞として弱形と強形の二つの形を持っていると考えられる。つまり弱形は *Ah+am=Ah'm* であり、強形は *Ah is* である。Hurston の黒人英語の例から繫辞の歴史を考えると、次のようになるだろう。

- (20) *Ah goin' see de man.*> *Ah is goin' see de man.*> *Ah'm goin' see de man.*~ *Ah is goin' see de man.*

(20) は、初期の黒人英語には繫辞は深層構造になかったが、脱クレオール化と共に深層構造に存在するようになったことを表している。変化の過程で Dillard の例文にある *Ah'm is goin' see de man.* のような形があったかどうかは確かではないが、もし話された時期があったとしたら、*Ah'm* は *Ah* の hypercorrection であろう。しかし Hurston の英語では *Ah'm* は *Ah+zero copula* の交替形として使われている。つまり弱形の繫辞は随意的に削除可能なのである。*Ah'm* の *'m* が繫辞として認識されている例に、次の文がある。

(21) Ah'm in heah, ain't Ah? (Their Eyes)

繫辞が深層構造にあるのか、表層構造に挿入されるのかという問題は、方言学者とクリオーリトの間で議論になるところであるが、20世紀の黒人英語を見ると、深層構造に存在していると思われるであろう。それを証明する例として、上の(16)の例文のように黒人英語でも決して削除の出来ない強形の繫辞が挙げられる。強形の *is* と *was* は、次のように変形規則の α 移動 (move α) の適用後、繫辞の後ろに痕跡 (trace) の残っている文 (22 a-h) に多く見られる。(22 i) は *pause*, (22 j) は動詞句削除 (VP Deletion), (22 k) は *is* に強勢のある文である。

- (22) a. So long as they get a name to gnaw on they don't care whose it is, and what about, 'specially if they can make it sound like evil.
 b. But nothin' never hurt me 'cause de Lawd knowed how it was.
 c. Wisht Ah knowed who it is.
 d. You ain't never knowed what it was to be treated lak a lady and Ah wants to be de one tuh show yuh. (以上 Their Eyes)
 e. Hello theah Snidlilits, I was wonderin' wheah you was.
 f. Whut did you say yo' name was?
 g. Lemme tell dis li'l Pink Mama how crazy ah is 'bout her mahself.
 h. Know who she is? (以上 Spunk)
 i. Whut made me do it is—oh, Ah don't know.
 j. Sterrett is jus' ez drunk ez Ah is.
 k. Dat's right, but Ah'm uh man even if Ah is de Mayor. (以上 Their Eyes)

繫辞が黒人英語の深層構造に存在していなかった初期言語には、 α 移動もなかったであろうし、強形・弱形の区別や現在・過去の区別もなかった。Hurston の英語には過去形の繫辞の削除は全く見られない。これは過去形で話す時は過去の時点に話題の焦点が置かれるためである。

Hurston の作品で *are* の使われる次のような例がある。

- (23) Grandma : You're gointuh ketchit f'um yo' haid to yo' heels m'lady. Jes' come in heah.
 Helen : Why, good afternoon. You're not going to whip this poor little thing, are you? (Spunk)

この会話は黒人である Grandma と白人婦人 Helen とのものであるが、黒人の仲間同士が話す場合には *are* は決して使われていない。黒人は *is* と *are* を使い分けることが出来、*are*

は特に形式ばった場合に使われるのである。このことは黒人英語の繫辞については、文法的な面と同時に社会的な面から説明されなければならないことを意味する。黒人は *is* を使っていたが、黒人社会を取り巻く変化によって、*are* が形式ばった場合に使われだしたのである。

4. 継続相 (Durative) の Be

黒人英語ではゼロ繫辞と *be* の用法に違いが見られる。ゼロ繫辞は一時的な状態や長く続かない状態を表しているのに対し、*be* は生来習慣として備わっている状態や長い間継続する状態を表している。Stewart (1975a) はこのことについて、次のように述べている。

- (24) On various occasions, I have pointed out that speakers of non-standard American Negro dialects make a grammatical and semantic distinction by means of *be*, illustrated by such constructions as *he busy* 'He is busy (momentarily)' or *he workin'* 'he is working (right now)' as opposed to *he be busy* 'he is (habitually) busy' or *he be workin'* 'he is working (steadily)', which the grammar of standard English is unable to make. (Stewart 1975a:231)

更に、次の (25) はガラ英語 (Gullah) であり、(26) は Dillard が *Domestic Manners and Customs in the West Indies*, 1834. の中から対照例として挙げている文である。

- (25) I be tired. 'I am always tired.' (Present Habitual) (Holloway & Vass 1993:2)
 (26) England be very fine country. England very bad country for poor servant.
 And then it be so cold. England no good country for poor servant.
 I think we be the best off. She good too much to me.
 She be my sisst. She fool too much. (Dillard 1972:101)

(26) の冒頭の文は、哀れな召使にとって、英国は永久に *very fine country* であって、離れる時には *very bad country* でなくなることを意味している。

このような *be* の用法は英語にはなく、クリオール語に由来すると思われる。アイルランド英語に、黒人英語に似ていると思われる反復または習慣的な行為を表す *Do+be~ing* がある。

- (27) Many's the time my da *did be saying* that the like of Miss Priscilla ...
 (おやじはなんべんも、なんべんも繰り返して言っていましたよ。プリシラお嬢さんのような方は...) — G. A. Birmingham. (現代英語学辞典1975:454)

(27) のアイルランド英語の *be~ing* は黒人英語のような長期的・永久的意味を含んでおらず、黒人英語に影響を及ぼしたとは考え難い。

この *be* の使用は黒人が標準英語にある原形の *be* を用いるようになると、黒人英語から消えてしまったようである。Hurston の作品には継続相の *be* はもう見られなくなっている。Hurston の作品の中に現れる *be* の用法を見てみよう。

- (28) a . Dat's de day every secret is s'posed to be made known. They wants to be there and hear it all.
 b . Den they'd tell me not to be takin' on over mah looks 'cause ...
 c . De day and de hour is hid from me, but it won't be long.
 d to fulfill my dreams of whut a woman oughta be and to do.
 e . Some folks never was meant to be loved and he's one of 'em.
 f . You ain't hardly old enough to be weaned.
 g . You ain't never knowed what it was to be treated lak a lady and Ah wants to be one tuh show yuh.
 h . You won't git far and you won't be long, when dat big gut reach over and grab dat little one, you'll be too glad to come back here.
 i . Ah kin be some trouble when Ah take uh notion. (以上 Their Eyes)
 j . He'll be back heah after while swallowin' an' workin' his lips ...
 k, then Gran'ma an' papa would be sorry they beat me so much.
 l . Well, girlye, you kin be a lotta help tuh me 'round dis house ...
 m . Dat ain't nothin' mah haih useter be so's ah could set on it.
 n, else they'll be totin' you out sooner than you expect.
 o . We has to be keerful. (以上 Spunk)

(28) の用法は元来黒人英語にあった継続相の *be* ではなく、助動詞あるいは不定詞の次に来る繫辞の原形であり、標準英語そのものである。Hurston の英語には継続相の *be* の使用は完全に消えてしまったようである。継続相の *be* は、以前はピジン・クリオール語に存在していたものが、後の脱クリオール化によって本来の用法が消滅したのである。Dillard (1972: 101) によると、今日でもカリブ海諸島のセント・ヴィンセントやジャマイカでは、継続相の *be* と同じ、あるいは相当する構文が見られるそうである。更に Dillard は、ジャマイカ人が彼に *He be sick* と言った文には未来の意味があり、習慣的・継続的な状態を表す表現としては、彼らにとって自然に思われないと述べている。これは Hurston の英語でも同じである。誰かが *He be sick* と言った場合は、*He'll be sick* の意味に取られるだろう。

5. Been

黒人英語に見られる *Been* 構文は、遠い過去を表したり、動作がずっと前に行われ、話し

ている時にもその効力があることを表す用法である。

- (29) Gullah & Tshiluba
 ef I ben know. 'if I had known.' (Past Perfect) (Holloway & Vass 1993:2)
- (30) I been know your name. 'I have known your name for some time and know it now.' (Labov 1972:54)
- (31) a. I *been* had that scar.
 b. We *been* lived here.
 c. He *been* in jail.
 d. I *been* been knowing Russel.
- (32) a. She been married.
 b. She *been* married. (以上 Baugh 1984)

(31) の文は、遠い過去にその事柄が始まり今もそうであることを意味し、(32) では強勢のない (32 a) は過去の事柄を表し、強勢のある (32 b) はずっと以前に結婚し、そして現在もまだ続いていることを表している。

確かに上に挙げた例からは、*been* 構文を単に *have* の削除された形だとは考えられない。

Hurston の作品の中に使われる *been* を見てみよう。

- (33) a. She de one been doin' wrong.
 b. Pheoby, we been kissin'-friends for twenty years.
 c. Look lak she been livin' through uh hundred years in January without one day of spring.
 d. Pheoby, for the longest time, Ah been feelin' dat somethin' set for still-bait, ...
 e. He seen he wuz sick—everybody been knowin' dat for de last longest,..
 f. Ah been waitin' a long time, Janie, but nothin' Ah been through ain't too much if you just take a stand on high ground lak Ah dreamed.
 g. Tuh think Ah been wid Jody twenty yeahs and ...
 h. De Grand Lodge, de big convention of livin' is just where Ah been dis year and a half y'all ain't seen me.
 i. Jody, maybe Ah ain't been sich uh good wife tuh you, but Jody—
 j. Honey, de white man is de ruler of everything as fur as Ah been able tuh find out. (以上 Their Eyes)
 k. Ah been married to you fur fifteen years, and Ah been takin' in washin' fur fifteen years.
 l. Since I been saved, I forgot all about such doings.
 m. I know you been up to something.
 n. You li'l hasion you! Wheah you been?

- o. Guess dey musta been cleanin' out de town when she lef'.
 p. It ain't always been too pleasant. (以上 Spunk)

been 構文が *have* の省略された形なのか、それとも黒人英語独自の *been* の意味を持っているのかは (33) の例文からは判断できない。それどころか黒人英語成立の歴史を全く無視して、Hurston の英語だけを見て *been* 構文を分析するならば、*have* の省略と取るのは当然である。Hurston の英語には、*Ah been know* のような *been* + 動詞の原形とか、*Ah been had dat scar* や *We been lived heah* のような *been* + 動詞の過去形の構文は、もう消えてしまったようである。だからといって、Hurston の英語は深層構造に *have* が存在するという事にはならない。Hurston の作品の中で明らかに、標準英語の *have* に当たるものが *been* の前に来ている例がある。

- (34) a. ..., but it's been singin' round here ever since de big fuss in de store dat Joe was 'fixed' and you wuz de one dat did it. (Their Eyes)
 b. He'd a' been tied up wid one long time ago if he could a' found one tuh have him.
 c. Is you been to school much? (以上 Spunk)

(34) の文は黒人英語ではいくぶん形式ばった言い方と言えよう。(34c) はある男性が少女に対して話している文であるが、彼は *Is you got a job yit?* も同じ構文として用いていることから、標準英語の完了形が彼の文法には形成されつつあると言える。又、(34) の例文のみで標準英語の現在完了形が黒人英語の中に確立したとは言いが、*been* 構文に変化が起きていることは確かである。Hurston の作品の中の *been* が黒人英語独自のものか標準英語の *have* の欠落したものかの判断は、黒人英語成立の歴史的背景を見てなされるべきである。そのように考えてみると、脱クリオール化が進む過程で *been* に強勢の置かれる構文が依然として好んで使われていることから、*been* の使用は黒人英語独自のものと言えるであろう。元来 *have* + 過去分詞の形式は黒人英語にはなかったものであり、(34) のような文を言った者が、はたして標準英語の完了形の意味で言っているのか確かではないが、*been* 構文とは別の完了形を把握したのは確かである。Hurston の作品の中に見られる *been* 構文の脱クリオール化は、本来の黒人英語独自の意味を保ちつつも、*been* の次にくる語の標準英語化によって、又、形式ばった時に使われる表現の変化によって少しずつ進められている。

6. 完了 (Perfective) の Done

Dillard (1972) は, *been* が遠い過去を表現するのに対して, *done* は近い過去を表現するとし, *He done go* は *He been go* より最近の行為を表すと述べている。つまり, *been* は遠隔完了相なのに対し, *done* は近接完了相ということになる。

又, Holloway & Vass (1993:2) の英訳を見ると, *done* には標準英語の完了の *have* と *already* の意味が示されている。

(35) Gullah & Tshiluba

we dun duh nyam. 'We are already having eaten.' (Present Perfect)

(Holloway & Vass 1993:2)

一方 Labov (1972) は, *done* が *have* の交替形として使われているように思われる次の文を挙げ, もしそうであれば, BEV を白人英語と別の体系としてみる価値はないと述べている。

(36) a. I done told you on that.

b. But you done tol' em, you don't realize, you d—you have told 'em that.

c. She done already cut it up.

更に Labov (1972) は, 他の方言に見られない強意を表す *done* があり (37 a - b), *done* の形式的な特性は *have* と同じではない (38 a - b) と次のような例を挙げている。

(37) a. After you knock the guy down, he done got the works, you know he gon' try to sneak you.

b. I forgot my hat! I done forgot my hat! I done forgot it!

(38) a. 'Cause I'll be done put—stuck so many holes in him he'll wish he wouldna said it.

b. I done about forgot mosta those things.

Labov は (37, 38) の例から, *done* は *already* や *really* の意味を表す副詞の機能をなし, 動詞として使われてはいないと述べている。しかし *done* には完了の意味があることから, 副詞と考えるのには問題がある。*done* は完了相として助動詞の一部と考えるのが妥当であろう。

Baugh (1983) は, *done* の主な機能として, 完了の機能と *really* に似た強意語の役割があるとし, 次のような例を挙げている。

(39) a. We done told him bout these pipes already.

- b. You done spent up all your money, that's why!
- c. They done sold all the Smokey Robinson tapes.
- d. I done forgot tu turn off the stove.
- e. I don't make no difference, cause they done used all the good ones by now.
- f. Well, we useda get into trouble, and... y'know... like... if Pop'd catch us, he say, "Boy—you *done* done it now."

Baugh は (39 a-d) は完了の意味を表し, (39 e) は *already* の意味があり, (39 f) は完了の意味を強調するために, *done* に異なった文法的機能を持たせていると述べている。

done についても *been* と同様, その歴史的な由来の源が問題になる。白人英語至上主義者は *done* は単に *have* の交替形であるとし, クリオール主義者はピジン・クリオール語にその起源を求め, そして Labov のような社会言語学者は, *done* の用途は社会的要因によるものだと言うであろう。これまで挙げた例から判断しても, *done* には標準英語にない表現が多いことから, その源を初期の英語や標準アメリカ英語に求めるのは難しく, アフリカ語と英語の接触によって作られた文法的形態を基にしていると考えるのが自然であるように思われる。

Hurston の作品の中で使われている *done* の用法について見てみよう。

- (40) a. He done called a meetin' on his porch tomorrow.
- b. B'lieved Ah done cut uh hawg, so Ah guess Ah better ketch air.
- c. Oh Jesus! Do, Jesus! Ah done de best Ah could.
- d. Fact is Ah done been on mah knees to mah Maker many's de time askin'...
- e. Grandma done been long uh few roads herself.
- f. You done been spoiled rotten. (以上 Their Eyes)
- g. You done right, Brother Sparrow.
- h. He done moved most of Lena's things ... over to the Bradley house.
- i. She done traipsed all over de woods, uh dancin' an' uh prancin' in it.
- j. An' Muttsy done gone crazy 'bout yuh.
- k. Dat girl done played me long enough.
- l. He done beat huh 'nough tuh kill three women, let 'lone change they looks.
- m. He done had dat 'oman heah in mah house, too.
- n. A new man done come heah from Chicago and he done got a place and took and opened it up for a ice cream parlor, and ... (以上 Spunk)
- (41) a. He know Ah done bore de burden in de heat uh de day. Somebody done spoke to me 'bout you long time ago.
- b. Janie, Ah done watched it time and time again.
- c. Janie, Ah done went through everything tuh be good tuh you and ...
- d. She act like we done done something to her.

- e. Ah ain't gittin' ole, honey. Ah'm *done* ole. (以上 Their Eyes)
- f. She done took a razor to me t'day an' Lawd knows whut mo'.
- g. You tole me so las' night an heah she done gone tuh bed on me again.
- h. Ada an' all uh them laffin'—they say ah done crapped. (以上 Spunk)

Hurston の作品に見られる *done* の用法を、完了の機能を持つもの (40) と、強意の機能を持つもの (41) に分けてみたが、どちらに解釈されても良いものがあり、この判断はあくまでも文脈によって決定されるものである。

完了の *done* には Holloway & Vass (1993) の解釈のように標準英語の *have* と *already* に似た意味があるが、強調語としての役割をなしていると思われる *done* には完了の意味はないのだろうか。次の文を考えてみよう。

- (42) a. (=37b) I forgot my hat! I done forgot my hat! I done forgot it!
- b. (=41e) Ah ain't gittin' ole, honey. Ah'm *done* ole.
- c. So she went to where she was... and got the nerve to lie to me... talking bout he done went to work. (Baugh 1983)

(42) の文にはもちろん強調の意味はあるが、完了の意味も備わっているように思われる。つまり、(42) の *done* を含む文は次の文の意味に近いのではないだろうか。

- (42)' a. I have really forgot my hat!
- b. I'm really having been old.
- c. ...talking bout he had surely gone to work.

日本語でも「あいつは俺のステーキを食べたんだ。食べちまったんだ。」とか「私は年取ってます。本当に年取ってしまいました。」という言い方には、強調の意味と同時に完了の意味もあるであろう。それと似た意味が *done* にあると思われるのである。

Hurston の作品に、*have done named/gone* のような構文を見ることが出来る。

- (43) a. Dey all useter call me Alphabet 'cause so many people had done named me different names. (Their Eyes)
- b. Ah'm goin' an' fetch her back. Spunk's done gone too fur. (Spunk)

(43) の構文は、*have* や *has* を標準英語から借りてきて用いる過剰修正 (hypercorrection) によるものである。黒人は形式ばった表現として過剰修正を行うが、この場合使用する本人が標準英語の文法を獲得する過程にあるとは考え難い。それは黒人英語の *done* の意味が依然として存在し、*done* が *have* の交替形になり得るなどと考える技量を所有しないまま、(43) の

文を発話しているからである。一方, Dillard (1972:48) は, 南部の白人の話し手が *done* を借りて *have/has done gone* という構造を用いると述べているが, 白人が黒人英語の *done* の意味を知っていて使用しているのか疑わしい。単に黒人は *have* を, 白人は *done* を借りているにすぎない。ここで注目に値することは, 黒人英語と白人英語間に言語の交流が行われることにより, 黒人英語の脱クリオール化が行われ, 更には白人英語に表現の変化が起ることである。

7. 接尾辞 (Suffix) の -s

接尾辞の -s は, 標準英語では 3 人称単数形と所有格と複数形に付く。しかし黒人英語では削除される場合がある。

- (44) a. A man get rich, he still pay taxes.
 b. He say iffen he ever hear of him doing any more preaching or ...
- (45) a. Gib tousand tank ebry day.
 b. We hab some valiant soldier here.
- (46) a. If a slave die, Massa made the rest of us tie a rope round he feet.
 (以上 Dillard 1972)
- b. Mr. Jesse Smith wife been my young Missus.
 c. Dave Owens, dat was my ol' marster' name, and dat was my daddy' name too.
 (以上 Schneider 1972)
- d. Kidnapper: Very well, what was your master's name?
 Cudjo: Me massa name Cunny Tomsee. (Stewart 1975a)
- e. That John house. 'That is John's house.'
 That you house. 'That is your house.'
 That house John's. 'That house is John's.'
 That house yours. 'That house is yours.' (Fromkin & Rodman 1974)

(44) は 3 人称, (45) は複数, (46) は所有格の -s の欠如である。

A. 3 人称単数 (Third person singular) -s の欠如

Hurston の作品の中に 3 人称単数 -s の欠如している例を見てみよう。

- (47) a. He give me every consolation in de world.
 b. He look like some ole skullhead in de grave yard.
 c. He pick it up because have to, but he don't tote it.

- d. Anyhow mah husband tell me say no first class booger would have me.
- e. She act like we done done something to her.
- f. Yeah, Sam say most of 'em goes to church so they'll be sure to rise in Judgment.
- g. Mah Madam help me wid her just lak she been doin' wid you.
- h. Over dere in Maitland, 'ceptin' when he go visitin' or somethin'.
- i. He stay poor and rawbony jus' fuh spite. (以上 Their Eyes)
- j. Whut she look like? (Spunk)

3人称単数形の *-s* の欠如とは反対に、3人称単数以外の動詞に *-s* を付加する例も Hurston の作品には多く見られる。

- (48) a. Ah hears what they say 'cause they just will collect round mah porch 'cause it's on the big road.
- b. Y'all makes me tired.
 - c. Ah wants to see you married right away.
 - d. Ah betcha you still craves sugar-tits, doncher?
 - e. Ah figgers we all needs uh store in uh big hurry.
 - f. Ah got tuh have a place tuh be at when folks comes tuh buy land.
 - g. Ah figgers we all needs uh store in uh big hurry.
 - h. Ah got tuh have a place tuh be at when folks comes tuh buy land.
 - i. Yuh needs plenty money if yuh wants any mo'.
 - j. Ah specks to pay him. (以上 Their Eyes)
 - k. You looks kinda young—kinda little biddy.
 - l. You starts at de tail and liffs off de bones sorter gentle and eats him clear tuh de head on dat side.
 - m. Ah knows uh heap uh things tuh teach yuh sense you gointer live heah—ah learns all of 'em while de ole lady is paddlin' roun' out dere ...
 - n. Miss Pinkie, Ah votes you g'wan tuh bed.
 - o. But ah never miss no girl ah wants, you knows me.
 - p. Everybody in this man's town knows you gets whut you wants.
 - q. Naw, ah come tuh take her to breakfus' 'fo we goes tuh de cotehouse.
 - r. There's plenty men dat takes a wife lak dey do a joint sugar-cane. It's round, juicy an' sweet when dey gits it. (以上 Spunk)

(47) と (48) の例を見ると、接尾辞の *-s* はあらゆる人称の動詞に付いており、*-s* がどのような人称に付くべきなのか、そしてどれが正しい付加なのかを認識していないようである。このことについて Burling (1973) は次のように述べている。

- (49) Something looking very much like the third person singular -s turns up in places where standard speakers never use it, and it is easy for a casual observer to conclude that black speakers rather perversely insist on leaving it off where it belongs (third singular) while adding it where it does not belong (all other persons).

The truth seems to be instead that a good many blacks have been drilled in the doctrine that “good” English requires the third singular -s, but because they have no basis in their natural speech for knowing a third singular verb when they come to it, they have difficulty limiting their use of the -s to the third singular alone. They overgeneralize and begin to add -s where no teacher intended them to. This is an example of a process known as “hypercorrection,” which occurs when a speaker tries to correct his speech but goes too far. (Burling 1973:49)

Burling は、黒人は3人称単数に -s を付けるのが正しい英語だと教えられていても、実際に話す場合には3人称動詞に限定することは難しくなり、他の人称にも -s を付けてしまうという過剰修正を行うと述べている。Burling の見解は正しいであろう。-s の使用には社会的要因が大きく関わっているように思われる。黒人が動詞に -s を付けるようになったのは白人英語の影響ではあるが、黒人は標準英語の3人称 -s 付加規則を適用する文法を習得しないまま、特に形式ばった環境のもとでは -s を好んで付け加えたようである。もちろん個人によって、あるいは地域によって用途は異なるのであるが、話し手の教養の程度や話す相手や話す状況も大いに -s の使用を左右する要因となっているのである。

B. 複数形 (Plural) の -s

黒人英語には初期の頃から複数形に -s を付ける規則が適用されていた。3人称単数形の -s と同じ発音にもかかわらず、特に複数形に -s が付けられるようになったのは、単数・複数の区別は人称の場合より意味的に重要であると共に、その区別は人称程難しくないのである。つまり、数量詞の次に来る名詞は複数の意味が明確である故に、-s を付ける必要がないのであろう。

Burling (1983) と Schneider (1989) からの例を見てみよう。

- (50) a. foots, mans, policemans, womans
 b. mens, childrens, feets, sheeps, peoples
 c. des'es (< desk-s), tes'es (< test-s) 'tests', ghos'es 'ghosts', gues'es 'guests',
 twis's 'twists'
 d. folkkses
 e. five cent, six year, When I's 'bout nine year ole ...

(50 a - b) は不規則形に *-s* を付けて複数形にするものであり, (50 c) は子音連結語の閉鎖音削除の例であり, (50 d) は *folks* は集合名詞として単数形に用いられるので, その複数形であり, (50 e) は数量詞の後に単数形の来る例である。

Hurston の作品の中では複数接尾辞 *-s* の欠如はないが, 不規則名詞に *-s* を付けることはある。

- (51) a. Dat's what Ah say 'bout dese ole women runnin' after young boys.
 b. Nothin' couldn't ketch me dese few steps Ah'm goin'.
 c. Pheoby, we been kissin'-friends for twenty years, ...
 d. Ah reckon dey never hit us ah lick amiss 'cause dem three boys and us two girls wuz pretty aggravatin', Ah speck.
 e. Ah can't be always quidin' yo' feet from harm and danger.
 f. ..., Ah'll take de five dollars. Dat mule been wid me twenty-three years.
 g. Don't tell me you done got knocked up already, less see—dis Saturday it's two month and two weeks.
 h. It takes money tuh feed pretty women. (以上 Their Eyes)
 i. Twenty-five years ago they all called her dat 'cause she *wuz* 'Forty-dollars-Kate.'
 (Spunk)
- (52) His belly is too big too, now, and his toe-nails look lak mule foots. And 'tain't nothin' in de way of him washin' his feet every evenin' before he comes tuh bed.
- (53) a. 'Tain't too many mens would trust yuh, knowin' yo' folks lak dey do.
 (以上 Their Eyes)
 b. Dat make 'm look lak a rich white man. All rich mens is got some belly on 'em.
 c. Dat heavy-set man wid his mouth full of gold teethes?
 d. Well, he tole us how de white womens in Chicago give 'im all dat gold money.
 (以上 Spunk)
 e. Folkses, de sun is goin' down. (Their Eyes)

(51) は正しく複数形が作られている例である。(51 g) の *month* が複数形になってないのは, 発音の難しさのためであり, 音韻上の問題である。(52) の話し手は *foot* の複数形は *feet* であることを知っていないながら *foots* を用いたのは, 足指の爪一つ一つが強情者の足のようだということを知りたいのであろう。(53) は規則形の類推として不規則な複数に *-s* を付けた過剰修正の例である。Hurston の英語を見てみても, 黒人英語はその深層構造に単数・複数を決める数 (number) が存在していることがわかる。標準英語とは別の形が現れるのは単に表層構造の違いであり, やがては社会的環境の変化から来る脱クリオール化の進行と共に標準語の形を習得していくであろう。

C. 所有格 (Genetive) の -s

Hurston の作品では上記の (46) の例と違い、普通名詞に付く所有格 -s の省略は見られない。それは、所有格を意味上明確にさせることが重要なことであることと同時に、名詞が二つ並ぶ構文に於いて、前の名詞に所有格を与える規則はそんなに難しくないので知られない。

- (54) a. Marse Robert's son had done been kilt at Chickamauga.
 b. Dat's just de same as me 'cause mah tongue is in mah friend's mouf.
 c. Less ketch Matt's mule fuh 'im and have some fun.
 d. Ah'm uh bitch's baby round lady people. (以上 Their Eyes)
 e. —he ain't skeered of nothin' on God's green footstool—*nothin'*!
 f. ... he struts 'round wid another man's wife—jus' don't give a kitty.
 g. Everybody in this man's town knows you gets whut you wants.
 h. Ah'm Ma's husband. (以上 Spunk)

代名詞の所有格を見てみよう。

- (55) a. Dat's just de same as me 'cause mah tongue is in mah friend's mouf.
 b. Brothers and sisters, since us can't never expect tuh better our choice, Ah move dat we make Brother Starks our Mayor until we kin see further.
 c. ... in de mornin' de overseer will take you to de whippin' post and tie you down on yo' knees and cut de hide offa yo' yaller back.
 d. 'Cause Ah hates de way his head is so long one way and so flat on de sides and dat pone uh fat back uh his neck.
 e. She's uh woman and her place is in de home.
 f. And Ah reckon they got me in they mouth now.
 g. Den they'd tell me not to be takin' on over mah looks 'cause they mama told 'em 'bout de hound dawgs huntin' mah papa night long.
 h. ... poeple like dem wastes up too much time puttin' they mouf on things they don't know nothin' about. (以上 Their Eyes)

Hurston の黒人英語では主格と所有格が同じなのは *they* のみである。しかし Burling (1973) によると、南部の黒人は時折 *he book*, *him book*, *we book* のように話し、特に *your* と *their* は主格と同一形になるそうである。

- (56) a. You can get you book over there.
 b. They drove off in they car. (以上 Burling 1973:50)

her は標準英語でも主格と所有格が同形なので問題はないが、*you* と *they* が所有格に使わ

れるのは *your, their* と発音が似ているためであろう。又、正しい所有格の発音を遅らしているのは、(56) の例でもわかるように、意味的なあいまいさは文脈ではほとんど起こらないためである。

所有格の歴史を見ると、意味的には次の名詞を修飾する所有格の名詞であると認識されていても、接尾辞 *-s* の付加や所有格形に直すという音韻的な面は、初期の黒人英語ではなされていなかったであろう。初期の黒人英語から深層構造に所有格が存在しながらも、名詞に *-s* を付けたり、所有格形にするという規則はなく、現在の所有格形は次第に黒人英語に浸透していったものである。黒人英語に変化をもたらしたのは、白人社会との接触という環境の変化が影響している。

動名詞の前の名詞の格は、標準英語では所有格、又は目的格であるが、黒人英語では目的格のみ使用されるのは、前の前置詞からのみ格が与えられており、次の動名詞から格が与えられることはないからである。Hurston の作品にその例文を見てみよう。

- (57) a. So 'tain't no use in me telling you somethin' unless Ah give you de understandin' to go 'long wid it.
 b. De thought uh you bein' kicked around from pillar tuh post is uh hurtin' thing.
 c. 'Tain't no use in you cryin', Janie. (以上 Their Eyes)

8. 累加否定 (Multiple negation)

黒人英語に見られる特徴のとして、一つの文に多くの否定要素を持つ語が現れることがある。白人の英語にも *We don't have no gas* や *I don't know nothing* のように *any* を *no* にする二重否定文は聞かれるが、黒人英語の否定構文は白人のと同じではない。主節の *S* に支配される全ての *any* を *no* に変えるだけでなく、副詞にも否定要素を付けるのである。

Hurston の作品から例を挙げてみよう。

- (58) a. I god, Ah ain't nowhere near old enough to have no grown daughter.
 b. ... Ah ain't got nothing to make me happy no more where Ah was at.
 c. She don't want nobody else to do neither if she kin help it.
 d. She couldn't look no mo' better and no nobler if she wuz de queen uh England.
 e. You oughta know you can't take no 'oman lak dat from no man lak him.
 f. Naw, Ah ain't no young gal no mo' but den Ah ain't no old woman neither.
 g. Ah just didn't never git no chance tuh use none of it.
 h. Nobody ain't been heah tuh buy none.

- i . Tain't *nothin'* no million years old. (以上 Their Eyes)
 j . Y'all know Joe ain't never had nothin' nor wanted nothin' besides Lena.
 k . It musta been a h'anat cause ain't nobody never seen no black bobcar.
 l . Ah b'leeve Ah'll run away and never go home no mo'.
 m . An ah wouldn't neither ef ah hadn't of seen *her*.
 n . You know no rooster don't lay no eggs. (以上 Spunk)

以上のような累加否定構文は、初めから黒人英語にあったものではないであろう。Baugh (1983) は黒人英語に累加否定が用いられるようになったのには、社会的要因があるとし、形式ばった情況に特に見られると述べているが、Hurstons の英語では必ずしもそうだとは思われない。Hurstons ではほとんどの否定文が (58) の規則に従っていることから、累加否定を用いる理由の一つには否定構文の作り方を知らないことが考えられる。つまり、深層構造には否定要素は一つだけであるが、表層構造で累加されているということである。しかし Labov (1972) は、BEV を話す者は他の方言を話す者と同じように否定要素を累加したり、消去したり出来、深層構造に二つ以上の否定要素を持つ文を扱うことが出来ると述べている。Labov の例は次のようなものである。

- (59) Huey : And he said, "Nobody talks about my mother."
 Michael : Well I'm not nobody; I'm somebody. That's what he said, "I'm not nobody; I'm somebody." (Labov 1972:194)

Labov の言うように黒人が (59) のような二重否定の文を標準英語の意味で話しているのであれば、そして自由に否定を累加したり、しなかったりすることが出来るのであれば、黒人英語の累加否定には、それをを用いる何らかの情況が背景にあることになる。それが Baugh の言う形式ばった表現であったり、否定を強調したい時の表現であったりする。このように黒人英語には、脱クリオール化の過程に於いて、反標準語化の現象も言語との交わりによって起きているのである。

9. お わ り に

黒人英語の成立の歴史とその構造を見ることによって、黒人英語の本質に触れ、黒人英語がどのような変化をなして来たのかを知ることが出来た。黒人英語はピジン・クリオール語を基にした独自の特徴を依然として保ちながらも、白人英語との接触によって少しずつ脱クリオール化が行われて来た。一方、社会環境の変化による標準英語化が黒人に過剰修正の表現をもた

らし、新たに黒人英語独自の構文を生み出して来た。

本稿は Hurston の作品をテキストとして黒人英語の構文を分析したが、20世紀前半の黒人英語の脱クリオール化・標準英語化の進行程度をそこに見ることが出来た。テキストの英語はあくまでも作家 Hurston が書いたものであり、実際に話されている言葉の記録ではないので、Hurston 自身の英語であることは否めないが、生きた黒人英語が書かれている以上、研究資料としては黒人英語の本質を知るに足るものであったと考える。

テ キ ス ト

Hurston, Zora N. 1965. *Their Eyes Were Watching God*, Negro Universities Press.
 _____ . 1985. *Spunk*, Turtle Island Foundation.

参 考 文 献

- Bailey, Beryl L. 1965. "Toward a New Perspective in Negro English Dialectology." *American Speech* 40, 171-177.
- Baugh, John. 1983. *Black Street Speech: Its History, Structure, and Survival*, University of Texas Press.
 東毅訳『黒人の街言葉—その歴史、構造、そして存続—』nci, 1989.
- Burling, Robbins. 1973. *English in Black and White*, Holt, Rinehart and Winston.
- Chomsky, Noam. 1977. *Language and Responsibility*, Pantheon Books.
- Davis, Lawrence M. 1970. "Social Dialectology in America: A Critical Survey," *Journal of English Linguistics* 4, 46-56.
- Dillard, Joe L. 1972. *Black English: Its History and Usage in the United States*, Random House. 小西友七訳『黒人の英語—その歴史と語法—』研究社 1978.
 _____, ed. 1975. *Perspectives on Black English*. Mouton.
 _____ . 1977. *Lexicon of Black English*, The Seabury Press.
- Eliason, Norman E. 1956. *Tarheel Talk: An Historical Study of the English Language in North Carolina to 1860*, University of North Carolina Press.
- Fromkin, Victoria and Robert Rodman. 1974. *An Introduction to Language*, Holt, Rinehart and Winston.
- Holloway, Joseph E. and Winifred K. Vass. 1993. *The African Heritage of American English*, Indiana University Press.
- 石橋幸太郎他編 1975. 『現代英語学辞典』, 成美堂
- Krapp, George P. 1924. "The English of the Negro." *American Mercury* 2, 190-95.
- Kurath, Hans. 1949. *A Word Geography of the Eastern United States*, University of Michigan Press.
- Labov, William. 1972. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*, University of Pennsylvania Press.
- Luelsdorf, Philip A. 1975. *A Segmental Phonology of Black English*, Mouton.
- Pyles, Thomas. 1952. *Words and Ways of American English*. New York: Random House.
- Schneider, Edgar W. 1989. *American Earlier Black English*, University of Alabama Press.
- Stewart, William A. 1975a. "Sociolinguistic Factors in the History of American Negro Dialects," In Dillard, ed. 223-232.
 _____ . 1975b. "Continuity and Change in American Negro Dialects," In Dillard, ed. 233-247.